

# ひぜんだより

肥前精神医療センター総合情報誌

## 第14号

新病棟  
新療育訓練棟 二棟  
三月下旬竣工予定!  




こちらは平成26年8月に竣工予定  
(病棟 二棟)

### 2014. 3

# 先端精神医学セミナーを開催しました

臨床研究部長 上野 雄文

## 第2回（平成25年7月22日）

九州大学大学院精神病態医学助教光安先生に、<sup>せんもう</sup>譫妄の病態についてお話いただきました。譫妄は一般診療科などでも多く発生する病態であり、その発生から生化学的な仮説に至るまで詳しいお話を頂きました。

現在でも譫妄はよく見かける病態に関わらず、まだまだ分からないことが多くこれからの研究の方向性がよく分かったと思います。光安先生の柔らかな語り口が印象に残りました。今後のご発展を期待できそうです。

## 第3回（平成25年8月21日）

佐賀大学医学部教授門司先生に、ミクログリアを中心とした免疫系に基づいた精神疾患の仮説と、この分野での現在までの世界の研究の動向をお話いただきました。

話題の細胞生物学の精神科への応用は門司先生のグループが世界でも最先端を走っています。抗生剤が精神病に応用できるかもしれないという驚きですが、将来研究が進めば、様々な分野の統合で精神医学が更なる発展を遂げることが出来そうです。



門司先生

## 第4回（平成25年12月18日）

玉川大学脳科学領域准教授松田先生に、機能的MRIの心理学への応用と精神医学への応用の可能性についてお話いただきました。松田先生は文部科学省のお仕事を兼任されており、国の脳科学への考え方を冒頭に教えて頂き、大変参考になりました。

本論では心理学的なアプローチの脳科学での根拠をお示し頂き、ともすれば文学的になる心理の科学としての立脚点を示していただけましたように思いました。余談ですが、初めて佐賀の地を訪問されたとのことで、当院の大きさと多様さに大変感心されていました。共同研究も提案して頂き今後も佐賀に来ていただけるとのことです。



松田先生



## 第2回肥前精神医学セミナー開催報告

臨床研究部長 上野 雄文

去る平成25年10月4日、当院で開催されました「第2回肥前精神医学セミナー」の特別講演として、九州大学大学院精神病態医学分野教授神庭先生をお招きしご講演いただきました。ご紹介するまでもなく有名な先生で、期待通り分かりやすく専門のうつ病の総論的なお話をされました。

話はうつ病本体にとどまらず、遺伝子の多様性と文化人類学的あるいは和辻流の地域人類学とでもいえる地域特性と文化の関連を全て包括する話をお聞きました。このお話はNHKのうつ病特集でも取り上げられており、精神医学を語る上で今後欠かせない立脚点になるように思います。

九州大学とは現在も共同研究を進めており、ますます肥前精神医療センターとの関係が深まりつつあり、協力しつつ良い研究が進むことを期待できそうです。懇親会にも参加して頂き、若手には良い刺激になったと思います。



神庭先生

## 薬剤師の専門性

～精神科薬物療法認定薬剤師・精神科専門薬剤師～

薬剤師 福山 雄卯介

近年、医療の高度化、多様化に伴い薬剤師の役割が大きく変化してきています。薬物療法の質の向上や効率化に対する社会からの要望が大きくなる一方、新しい作用機序をもつ医薬品が多数登場し、薬物療法は複雑化しています。薬剤師は、これまで調剤や医薬品の供給を中心とした薬剤部門内における業務が多かったのですが、現在では地域や医療施設など医薬品が用いられるあらゆる場面で必要とされ、多職種医療チームの中で薬の専門家としての役割が求められるようになってきています。



そのため、日本病院薬剤師会（以下、日病薬）をはじめとした各種学術団体による認定薬剤師制度が発足し、現在、日病薬では精神、がん、感染、妊婦・授乳婦、HIVの5領域で認定が行われています。一般薬剤師は、各領域の講習、症例報告、試験をパスして認定薬剤師に、認定薬剤師は学会発表、学術論文、試験をパスして専門薬剤師へとステップアップしていきます。

精神科領域において求められる薬剤師の専門性とは、精神疾患、向精神薬、精神保健福祉などに関する知識とその知識を臨床薬剤師業務に反映する技術であり、薬物治療における専門性です。したがって、精神科医療全体を理解した上で、適切な薬物治療を支援するための専門的な技術が求められます。また、精神科医療においては特にチーム医療が重要であり、このチーム医療における薬剤師の役割は、医師の処方設計への関与、効果・副作用・相互作用等のモニターなどの薬学的ケア、看護師を始めとした医療スタッフへの薬剤情報の提供などがあります。

私は平成23年4月から当院に赴任し、医師や看護師をはじめ多くのスタッフに支えられ、翌年に精神科薬物療法認定薬剤師を取得することができました。さらに現在、精神科専門薬剤師の認定要件を満たし認定申請中です。まだまだ薬剤師として未熟であり皆様方に様々なことを教えていただいております。少しでも認定資格を生かし、精神科薬物療法においてお役に立てるようこれからも努力していきたく思います。今後ともよろしくお願い致します。

# 西二病棟閉棟について

## 西二病棟閉棟を終えて

病棟医長 吉森 智香子

木枯らしに向かって桃の蕾がわずかにふくらみはじめる頃、西二病棟は閉棟いたしました。

私は当院で西三-1、東三-2、そして西二病棟と3度目の閉棟を経験しました。ですから、患者さんたちとご家族に次の居場所を提案し、受け入れてもらうことの大変さは十分に沁み込んでいました。しかも長い間どこへも動いていただけなかった方々がほとんどです。

しかし、西二病棟は以前から退院促進に向けてスタッフが努力を続けていた病棟であったことが幸いし、予想をはるかに超えて順調に患者さんたちに次の居場所へ動いていただくことができました。それでも、特にソーシャルワーカーさんたちは患者さん家族の苦情を一身に受けることがしばしばで、大変だったことと思います。それぞれの主治医の先生方、病棟師長はじめ受け持ちスタッフ、幹部の方々、力を注いでいただきありがとうございました。患者さんを受け入れていただいた他の病棟の方々ありがとうございます。平野前院長先生からも、患者さんたちに直接お声かけいただいて大変助かりました。

今は新しい場所でそれぞれの患者さんたちは穏やかに生活しておいでだと思います。家族の方も、「近くの病院に移してもらったので便利になった」と、のちには感謝を伝えられたと聞いており、患者さんとご家族のために最善の方向でと願って活動してきたことがほほ叶えられ安堵しました。

西二病棟は肥前精神医療センターの「古き良き時代」の姿を象徴する最後の病棟だったと思います。寂しくなりますが、これからの時代に求められる精神科の病院の理想に近づけるように私たちは努力を続けていかなければなりません。患者さんたちからいただいた笑顔を忘れないように日々の臨床を積んでいきたいと思えます。

最後に、退院促進と新しい患者さんの受け入れの両方に尽力してくださった西二病棟スタッフの皆さんに、もう一度心から感謝申し上げます。皆様本当にありがとうございました。

## 西二病棟の思い出

西二病棟 看護師長 石崎 てるみ

西二病棟は、男女混合の開放病棟です。当医療センターの中では歴史の長い病棟です。病床数は50床で、比較的状态が落ち着いている方が入院されています。毎日、作業療法を行い自分の興味のあることや散歩、買い物も自分で出来るように、自立に向けて生活されています。

近年、精神科の病院にも「入院医療中心から地域医療中心」という方策が実現化してきました。西二病棟でも、ここ数年は退院促進に力を注ぎ、看護研究を行い、様々な職種の方々との調整を行ってきました。退院された方々も地域の施設やグループホーム、または自宅へと移られることとなりました。

患者さんやご家族のなかには、地域へ移ることに不安が強くて、どうしても難しいと言われる方もおられました。私たちは全ての患者さんに対し、受け持ち看護師を中心に主治医、ソーシャルワーカーを交え何回も話し合いを行ってきました。その人にとって一番良いと思われる環境を提供することを第一に考えて、患者さんやご家族に説明を重ねてきました。話をするうちに患者さんは、「自分の生活の場」をどこにおいて「どのような生活をしたいか」を真剣に考えるようになり、これまで病棟で積み重ねてきた作業療法や、外出、買い物も新しい生活の基盤となり、一人ひとり個人が自分に合った生活を選択することにつながりました。

患者さんを見送る時に印象的だったのは、ほとんどの方が「では、さようなら。」と手を振り、笑顔で病棟を後にされたことです。自ら決めたことに自信を持ち、堂々とした姿にはたくましさを感じました。

病棟集約という大きなプロジェクトを終えた今、退院された方々が、今後地域において自分が持つ力をより生活に活かされることを、スタッフ一同祈念いたします。

最後の患者さんを見送ったあと、院長先生より私たち職員にねぎらいの言葉をいただきました。スタッフもまた明日から新しい病棟でそれぞれが頑張る事となります。これまでいろいろな形でご支援、ご協力いただきました方々に深く御礼申し上げます。

## スタッフの思いで

● 病棟での患者さんと私たちは家族のような関係でした。一人ずつ地域へ帰られるたびに病棟が静かになっていく寂しさを身を持って感じました。病院の生活から新しい生活の場へ旅立つ患者様の力強さには、ただただ感動でした。

● 受け持ち患者さんが施設に退院され頑張っているという電話を頂きました。病院ではあまり活動に参加されなかった方が、退院後就職されたと聞いて感慨深いものがありました。患者さんにはまだまだ力が残っているのだなと感じ、退院促進の意義と残された力を見つけ活かす、伸ばす技術の必要性を改めて実感しました。



● 西二病棟は入職して初めての病棟でした。退院支援を学び、コミュニケーションがとれるようになった方がどんどん退院されると、寂しさを感じましたが、患者さんにとって何が一番大切なのか考えるきっかけになりました。

● 患者さんがそうめん流しの準備を楽しそうにされていた表情が印象的でした。今年就職した私は、嬉しそうな表情で地域に帰られる患者さんを多くみて嬉しく思い、大きな可能性を感じました。

● 開放病棟である西二病棟には、束縛のない雰囲気と患者さんの尊厳を大切にしているイメージを持って仕事に取り組むことができました。

● 退院促進活動では長期入院患者さんに新しい環境に適應できる側面を見つけたことにやりがいを感じました。20年ぶりの故郷である鹿児島に転院され、錦江湾をみて笑顔を見せられたことが忘れられません。これからも患者さんが自立していける可能性を見つけて頑張りたいと思います。



病棟の作業療法で患者さんが協力して干支の人形を作りました。今年度の文化祭で副院長賞を受賞した作品です。

● いろいろな疾患、症状の患者さんの看護場面を思い出します。どの方も共通して感じたことは、スタッフ側が誠意を持って対応すれば患者さんもそれに応えてくださることです。また一人一人を理解し、援助していくためには、スタッフ側の幅広い知識と柔軟な対応が求められることを実感しました。日々進歩していく精神科医療の現場で常に新しい知識を取り入れ、患者さんにより良い医療を提供できるよう今後も頑張っていきたいと思ひます。

● 西二病棟に9年間勤務しました。近代建築の中で貴重な木造の建物は深い歴史を感じさせました。この建物ともお別れとなり、西二病棟がなくなるのはとても寂しいことですが、私たち職員もこれから新しい場所でもまた沢山の思い出を作っていきたいと思ひます。





作業療法士 笹田 梨紗

### ■納涼祭(平成 25 年 8 月 6 日)

病棟関係なく参加者全員で大きな輪をつくり、盆踊りで盛り上がりました。楽しすぎたのか、興奮がなかなか冷めない方もいらしたようです。もちろんお祭りに欠かせない模擬店も、多くの病棟から出されていました。なかでもフローズンは人気が高かったようで、美味しそうに召し上がっている参加者の姿が印象的でした。西四病棟(薬物)からは、綿菓子を作る機械が用意されていたため、参加者は自分で綿菓子を作ることができ人気が高かったようです。出し物では真美体操の先生方によるパフォーマンスもあり、誰もが参加して楽しい盛りだくさんの内容となっていました。



### ■肥前音楽祭(平成 25 年 10 月 8 日)

各病棟から歌や楽器演奏、真美体操が披露されました。楽しい演出もあり各病棟で工夫されていました。舞台に立ち多くの人が見ている中で緊張もあったと思いますが、練習の成果が大いに発揮されていました。午後からは職員パフォーマンスと三線口ピンスのゲスト演奏がありました。歌に聞き入り、また楽しく踊り、参加者が一体となる印象に残る音楽祭でした。



### ■文化祭(平成 25 年 11 月 26 - 27 日)

今年度の院長賞は東二-2病棟の「大きな栗の木とみの虫たち」でした。展示物も多く、素敵な作品展示会となっていました。2日目の模擬店も各病棟から多くの出店がありました。午後からは模擬店だけでなく“つくしパフォーマンス”もあり、とても楽しい雰囲気の中、盛りだくさんの文化祭となりました。



## 第13回吉野ヶ里歴史公園リレーマラソンへの参加について

東二-1病棟 看護師長 大久保 祐子

去る平成 25 年 12 月 8 日(日)、つくし病棟のメンバーで吉野ヶ里歴史公園リレーマラソンに参加しました。今年で3回目の参加です。子ども達、ご家族、スタッフと、みんなで力を合わせて42.195kmをたすきで繋ぎました。

今年は、院長先生がトップバッターとして参加してください、たすきリレーが始まりました。医師、看護師、保育士、学校の先生、心理士、作業療法士、PSWとたくさんのスタッフの協力がありました。

子ども達は練習の成果を発揮してカー杯走り、ハイタッチをして最高の笑顔をみせてくれました。運動が苦手な子ども達も、主治医の先生やご家族の伴走で嬉しそうに走っていました。人混みや騒音が苦手な子ども達が走る姿をみて、ご家族もビデオカメラを構えて応援して下さいました。毎年恒例となった手作り豚汁で身体を温め、最後の100mは全員で走ってゴールを目指しました。アンカーをつとめた男の子はベストタイムで応援に応え、制限時間1分前にゴール。賞賛を浴びて、賞状を掲げていました。

この大会での経験が、子ども達やご家族の自信につながれば嬉しく思います。



「院長先生ガンバレ〜」



「あともう少し〜」



「時間内にゴールしたぞー!!!」



# 野球部活動報告



副看護師長 松尾 康志

## ◆肥前+菊池連合軍VS琉球病院野球部の定期戦!

平成 25 年 2 月 2 日に琉球病院と定期戦を行ってまいりました! 15 年程前に肥前野球部OBのスタッフが琉球病院に転勤になったことを契機に定期戦が始まりました。

今回はOBの興梠師長と花房師長が菊池病院に転勤になった関係もあり、初めて菊池病院からも参加がありました。例年天気が悪く、小雨が降ったりする中で試合を行ってきましたが、今回は珍しく天気が良く、気温も 25°C 近くまで上がる中、肥前+菊池連合軍と琉球病院との対戦となりました。

菊池病院スタッフの大活躍で前半リードする中、後半はジリジリと琉球打線が追いつき、9回まで行った結果、8対7でかるうじて肥前+菊池連合軍の勝利となりました。

その後、懇親会では琉球野球部の塚原看護師(肥前野球部OB)はもちろん、村上院長をはじめ前田副看護部長や樋口師長(肥前野球部OB)、吉岡師長も参加され、時間を延長して旧交を温めました。

またこの時期はちょうどプロ野球がキャンプインしており、前日はキャンプ視察に、後日は観光やショッピングと野球以外にも沖縄を満喫してきました。

## ◆吉野ヶ里町ナイター選手権に参加!!

吉野ヶ里町内の企業やグループなど 9 チームが参加し、予選リーグが平成 25 年 7 月 1 日~ 22 日まで行われました。この予選リーグを 6-0 と 1-1 の 1 勝 1 引き分けで勝ち抜け、7 月 29 日の決勝トーナメントに臨みました。

相手は吉野ヶ里町役場チームで、130 キロを超えているだろうと思われる直球と、プロ並みの縦に落ちるスライダーに翻弄され、押し気味ではありましたが、決定打が出ず 0 対 1 で惜敗しました。

## 最後に・・・

最近では当センターの職員だけでは人数が揃わないので、OBで近くの病院に転勤になった職員やその同僚、職員の身内など、助っ人が半数位になっております。

今後も野球部の一大イベントとして沖縄遠征を行いますし、地域での野球大会にも参加していきたいと思っております。野球経験を問わず、野球に興味のある方、ベンチで応援したいという女性スタッフも大・大・大歓迎です。**野球部へ入部待っています!**





精神科医  
橋本です

## 目次

- P.1 ・先端精神医学セミナーを開催しました
- P.2 ・第2回肥前精神医学セミナー開催報告  
・薬剤師の専門性 ～精神科薬物療法認定薬剤師・精神科専門薬剤師～
- P.3 ・西二病棟閉棟について
- P.5 ・肥前NewS 肥前精神医療センター三大行事開催報告  
・第13回吉野ヶ里歴史公園リレーマラソンへの参加について
- P.6 ・野球部活動報告

### ◆編集後記◆

朝晩の冷え込みも和らぎ、春の訪れを少しずつ感じるようになってきました。この春当院は新しい病棟二棟と療育訓練棟が竣工します。これまで約40年間使用してきた建物への感謝の気持ちを忘れず、新しい建物と共に職員一同頑張ります！(O.N)



## 患者様の権利

- 1.安全で、かつ平等な最善の医療を受ける権利
- 2.疾患の治療等に必要情報を得、また教育を受ける権利
- 3.治療法を自由に選択し、決定する権利
- 4.プライバシーが守られる権利
- 5.常に人としての尊厳を守られる権利
- 6.医療上の苦情を申し立てる権利
- 7.継続して一貫した医療を受ける権利
- 8.QOLや生活背景に配慮された医療を受ける権利



平成26年3月1日発行

編集・発行：広報委員会（橋本(喜)、仲地、中川、山元、太田、中島、天野、山田、村上、前田、岩崎、笹田、郷原、小坪、大庭(直)、大庭(三)）

発行所：独立行政法人国立病院機構 肥前精神医療センター

〒842-0192 佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津160

TEL 0952-52-3231 Fax 0952-53-2864

ホームページ <http://www.hizen-hosp.jp/>